



「成長ホルモン牛肉」の処分地にされる日本

あるセミナーで「ヨーロッパでは米国の牛肉は食べずに、オーストラリアの牛肉を食べています」と紹介してくださったので、次の事を補足させていただいた。「日本では、米国の肉も、オーストラリアの肉も、ホルモフリー表示がない限り、同じくらいリスクがあります。オーストラリアは、成長ホルモン使用肉を輸入禁止にするEUに対しては、成長ホルモンを投与しない肉を輸出している。ただ、「ザル」となっている日本向けには、しっかり投与しています。このことは日本の所管官庁にも確認済みです」。成長ホルモンとは、牛や豚などの成長を促進する目的で使われる化学物質である。代表的な成長ホルモンには、女性ホルモンとしても有名なエストロゲンがある。このエストロゲンを、牛の耳にピアスのようなものをつけて、肥育時に投与することで、牛の成長を早めることが出来る。ところが、このエストロゲンには乳がん細胞の増殖因子となる危険が指摘されており、日本国内では使用が認可されていない。だが、前述の通り、アメリカ産やオーストラリア産の輸入牛肉には使用されている。EUは、米国からの報復関税措置にも負けず、成長ホルモンが投与されたアメリカ産牛肉を禁輸している。そのため、最近ではアメリカのほうでも、EU向け牛肉は肥育時に成長ホルモンを投与しないようにして、輸出しようという動きもあるという。アメリカやヨーロッパでは、こうした成長ホルモンを使用しない「ホルモフリー」牛肉の需要が高まっている。ホルモフリー牛肉は、通常の牛肉より4割ほど高価になるが、これを扱う高級スーパーや飲食店が急増しているという。

また、ニューヨークで暮らす日本人商社マンの話として、「アメリカでは牛肉に『オーガニック』とか『ホルモフリー』と表示したものが売られていて、経済的に余裕のある人たちはそれを選んで買うのがもはや常識になっている」という。一方、日本では日米貿易協定が発効した2020年1月だけで、成長ホルモンを使用したアメリカ産牛肉輸入が前年同月比1.5倍に増えるなど、アメリカ産の成長ホルモン牛肉に飛びついている。アメリカやヨーロッパでホルモフリー化が進む一方、本国で売れなくなった成長ホルモン牛肉は、日本に輸出して捌く、という構図が生まれている。

「輸入小麦は危険」の理由

アメリカの小麦農家は収穫前に乾燥させるため、除草剤を小麦に散布しているという疑いがある。グリホサートは、発がん性の疑いが指摘されているほか、人間の体内に入ると、腸内細菌を殺してしまいさまざまな疾患を誘発することも懸念されている。(この指摘、懸念を否定する見解もある。)

グリホサートはもともと遺伝子組み換え(GM)作物とセットになった農薬だ。グリホサートに耐性を持ったGM作物は残して、それ以外の雑草を枯らす。また、遺伝子組み換えでない小麦の収穫前にグリホサートをかけて、乾燥させて収穫作業を楽にする、という使い方もある。

収穫してサイロに積める際、防カビ剤を噴霧しているという疑いもある。しかし、出荷前の穀物に農薬をかけると、より残留しやすくなる。ちなみに防カビ剤は日本では収穫後の散布が禁止されている。

だが、アメリカの農家では防カビ剤の収穫後(ポストハーベスト)散布を行っている。研修でアメリカに行った複数の日本の農家の証言では「これは日本輸出用だからいいのだ」と言っていたという。

農水省が2017年に行った調査によると、輸入小麦のうち、アメリカ産の97パーセント、カナダ産の100%からグリホサートが検出されている。また、農民連食品分析センターの検査によれば、日本で売られているほとんどの食パンからグリホサートが検出されている。ただ、当然ながら「国産」「十勝産」「有機」の表示があったパンからは検出されていなかった。日本では小麦の収穫前にグリホサートをかけたりはしない。

また、日本の国会議員らの毛髪から、輸入穀物由来と思われるグリホサートが高い確率で検出されたこともわかった。その際の数値は低く、健康に問題のあるレベルではないという見解もあるが、グリホサートは内分泌かく乱物質であるため、微量でも人体の調整機能が壊されるという意見もある。

グリホサートは日本の農家も使用している。ただ、あくまで除草剤として使用しており、作物にかけるという使用法はしていない。そのため、通常なら日本人の体内に入らないはずなのだが、アメリカからの輸入穀物(小麦やGM大豆、GMコーン)に残留するグリホサートを、日本人は摂取してしまっているのだ。

